

日本哲学会林基金若手研究者研究助成報告書

嶺岸佑亮

1. 研究の背景

本研究は、G.W.F. ヘーゲルの『精神現象学』を手掛かりに、自己意識概念を新たな角度から光を当て、その多様な側面を浮き彫りにすることを目的とする。従来の研究では、ヘーゲルにおける自己意識理論は主として『大論理学』における主体性思想を軸として議論がなされてきた。ヘンリッヒやデュージングはそうした方向を代表する。彼らの研究は、カントの『純粹理性批判』の演繹論における純粹統覚の思想や、フィヒテの自己定立的な自我の思想を踏まえたものであり、ドイツ観念論の歴史的展開の流れに即したものである。ただし、それぞれの個人が〈私は私である〉ということや、〈私は私自身にとって存在する〉ということが具体的にどのようにして可能となるのか、というところにまで踏み込んでいないきらいがある。こうした問題は、シェリングに定位して自己意識概念を研究するフランクの場合もやはり同様である。これら先行研究のいずれでも看過されているのは、個人の自己意識は文化や社会の具体的な領域や文脈において成立する、という点である。まさにこのような理解の手掛かりを指し示すものこそ、ヘーゲルのもう一つの主著である『精神現象学』である。同書では、知覚、自然観察、労働、家族、市民社会、国家、道徳、宗教などきわめて多岐にわたる領域において、意識と対象の関係を論じている。これらの領域を一つ一つ丹念にたどることで、自己意識が具体的にどのように成立するのかを解明することを目指した。

2. 研究成果

本研究の成果は、主として以下の点にある。1) 自己意識は個人の内面の領域に関わるものでありながらも、それと同時に、外なる現実の世界に立脚して活動することを通じてはじめて成立する。私はいわばはじめから自分自身として実際に存在するのではなく、むしろ自分自身であるようになるのである。このことは、さまざまな対象や別の自己意識との関係性が不可欠であることを意味する。私はこうした様々なものとの関わりにおいて、なおかつ、こうした関わりから自分自身へと向き変えることによってこそ、〈私は私である〉ようになるのである。

2) 私は他の自己意識との共同体のうちであってこそはじめて、本当の意味で自分自身たり得る。私のあり方というのは、単にこの私だけのものなのではない。そうではなくて、私は別の自己意識によって承認されることではじめて、共同体の中で自分独自のあり方を獲

得するようになる。このような承認されたあり方は同時に、個人の自己形成を意味する。まさにこのことこそ、ヘーゲルが「教養形成 (die Bildung)」のもとに言わんとするところである。このことを踏まえるならば、それぞれの個人が本来何者であるかということは、あらかじめこれであると指示せるような、自明なものや了解済みのものではなく、個人自身の活動を通じてはじめて明らかにされ、獲得されるものであることが分かる。「労働 (die Arbeit)」はこうした文脈において理解されるべきものである。

3) 私が他のいかなるものとは異なるような、〈この私〉たり得るのは、私が同時に普遍的なあり方をすることに基づく。私は〈このもの〉としてみるならば個別的なものである一方で、それと同時に、私は共同体の中に位置づけられたものとしてのみ存在することが可能である。このことは、私が普遍的なものであることを意味する。ただし注意すべきことに、私の普遍的なあり方は私の個別的なあり方を根絶するのではない。かえって、私は自分の活動によって普遍的なあり方を実現するのである。以上のようにして、私の自己意識のうちには「自己実現」が重要な役割を果たすことが明らかとなる。『精神現象学』の後半部で議論される道徳や良心や宗教の問題は、個人の自己実現のプロセスをその内面的なあり方から示したものといえる。

3. 今後の展望と課題

以上の研究を通じて、『精神現象学』を手掛かりにヘーゲルの自己意識理論を多様な側面から解明することが可能となった。そのことにより、個人の社会的・文化的な側面についても論じることが可能となったといえる。その際、個人の普遍的なあり方や自己実現のプロセスのうちに見られる、「自己否定」という契機をどのようにとらえるべきであるかがさらに問われる。すなわち、個人がまさに自分自身であるようになるのは、自分で自分を否定することを通じてなのである。このことを踏まえるならば、『精神現象学』全体を貫くような「否定」の理論とはどのようなものであるか、ということを探求する必要があることが分かる。こうした方向に沿った研究は、従来の研究にはまだみられない。この研究を行うためには、『大論理学』「存在論」初版における「対自存在 (Das Fürsichsein)」の箇所を徹底的に検討する必要がある。そうすることで、個人が自分自身に向き直り、自己関係的になるプロセスを掘り下げて解明することが可能になるだろう。